

幕 末 の 兵 法 書

葵文庫の和書の中には、兵学書の類が二十数点ある。それらは主として諸術調所及び箱館奉行所の旧蔵書である。内容は英、蘭、仏等の西洋兵学書の翻訳刊行本あるいは写本である。

享和2年(1802)2月、幕府は、蝦夷奉行を新設し、翌3月、箱館奉行と改称した。その後、一時廃止されるなど紆余曲折を経たのち、安政元年(1854)、再び箱館奉行が設置された。このことは、蝦夷地に対するロシアの脅威、日本への貿易市場化を意図する諸外国への対応など、内憂外患に対処する幕府の苦悩を象徴しているとも考えられる。箱館は、安政元年3月にアメリカ、9月にオランダ、12月にロシア、そして安政5年(1858)にはフランスと、相次いで諸外国の開港場となり、そのため箱館に渡来する外国船、外国人も多く、洋学に対する関心も高かった。こうした事情に対応すべく、安政3年(1856)、幕府は箱館奉行の要請で洋学・兵学の研究機関である「諸術調所」を開設した。

このような事情から、箱館奉行所、諸術調所には、洋学関係の蔵書が多く収集された。葵文庫蔵書中の多くの兵学書は、箱館を取り巻く当時の緊迫した情勢を伝えている。

25～35でそれらの一部を紹介する。

25	埴氏三兵答古知幾（でしさんぺいたくちき）		
A J -24		Decker原著 訳者不明	
プロシアのデッケル(Decker) 著「歩騎砲三兵戦術」(1831) を、オランダ人ブーコップ (Boecop) が蘭訳し、さらにそれを邦訳したもの。			

- ◆ 嘉永3年(1850)頃の成稿とされている。邦訳者は不明であるが、高野長英という説もある。原書は、Karl von Decker “Taktik der Drei Waffen” (1831)を蘭訳した“Taktiek der Drie Wapens”である。

「答古知幾（たくちき）」とは、蘭訳本の書名中のTaktiek の音訳で、「戦術」という意味である。また、「三兵」とは歩兵、騎兵、砲兵を指す。本書の内容はヨーロッパにおける軍隊戦術の歴史的事実を詳述したものである。

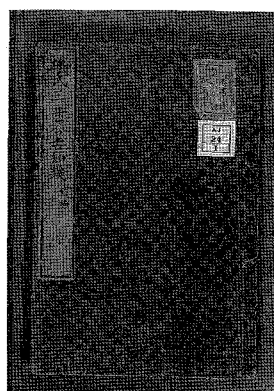
- ◆ 本書は前篇20巻、後篇20巻の構成であるが、当館所蔵は前編20巻のみである。13冊に製本されており、各冊第1ページ右上に「静岡師範学校」右下に「諸術調所」「駿府学校」の印記が確認される。このうち駿府学校の印記は、いずれも諸術調所の印記の上に重複して押されている。

<参考文献> 「静岡県立中央図書館蔵 諸術調所・箱館奉行所旧蔵書瞥見」

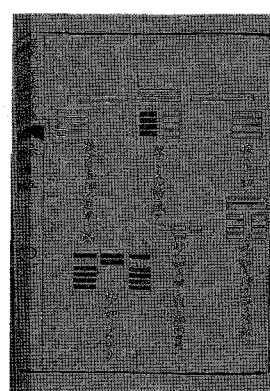
(『葵』12号 所収) (SZ01-3)

『埴氏三兵答古知幾』における歴史的要素－デッケルの時代意識の解剖－」

(『蘭学資料研究』第65号 所収) (Z40-17)



25
埴氏三兵答古知幾



25
埴氏三兵答古知幾